

海外 論文 レポート

Big in Japan (日本の大きな実践)

日本について考えるとき、世界で最も発達した資本主義経済国のひとつを思い浮かべるだろう。だが、一方で日本には巨大で活気あふれる協同組合運動もあるのだ。

日本の生協運動は、食品販売や医療そしてコミュニティ・サービスのような市場において、実質的な経済力を行使する、非常に強力なものだ。同様に、従業員所有の労働者協同組合セクターも特に子育てや高齢者介護の市場で、地域のニーズに応じて、事業を行いサービスを提供するための新しい、そして共感を生むやり方を開発して、力強く拡大している。

日本労働者協同組合連合会(労協連)は、組合員が所有し民主的に管理する労働者協同組合の中央組織である。労協連の目的は、人々と社会に役立つ仕事を起こし、よい仕事そしてディーセント・ワークを提供することにある。

労協連は、介護、仕事そして生きがい活動を提供する高齢者協同組合の先駆者である。最も重要なことは、高齢者は「福祉」の対象という理念に挑戦し、高齢協の組合員が介護や支援の受け手であると同時に担い手でもあり得るということだ。労協は、ヘルパー養成講座や健康改善プログラムを開催するのと同様に、豆腐づくり、緑化、駐車場管理そして

配食サービスなどあらゆることを行いながら仕事を創り出している。最初の高齢者協同組合が生協法人として1995年に設立されて以降、運動は22法人組合員3万人以上にまで広がった。

労協連はさまざまな領域で地域と環境に根ざした事業 子育てからメンテナンスや建設事業、そして公園や庭木の管理までを抱えている。労協連には現在、500の事業所が加盟し約9,000人の組合員が働いている。

このような発展にもかかわらず、日本では労働者協同組合は明確な法的位置づけがなされていない。このため、労協連では、働く者自身によって管理され経営されることが求められる企業をつくる方法を簡易にそして明確にするための法制化を強く推進している。連合会の25周年を記念して最近東京で『尊厳ある労働の社会的実現へ 協同労働の協同組合の法制化を求めて』と題するシンポジウムが行われ、海外報告者としてILOのユルゲン・シュベットマンとイギリス協同組合連合会のヘレン・シーモアが

法制化の必要性を訴えた。

わくわくクラブ

わくわくクラブ(“わくわく”とはエキサイティングを意味する日本語)は、東京の下町で放課後の学童保育を行う協同組合です。かなり小さな子供たちでも、放課後、自分で歩いて集まってきて、父母が家に連れて帰ります。これは東京のコミュニティが、いかに安全かの証でもあります。学校が終わった後の時間を、明るく心地よい環境の中で、子供たちは本を読み、遊びそして楽しんでいきます。

(“Co-operatives” Issue Five)



この記事は、昨年9月に開催した「9.18 国際シンポジウム 尊厳ある労働の社会的実現へ」に報告者としてご参加いただいた Co-operativesUK のヘレン・シーモアさんが、日本の労協運動に関して英国の “Co-operatives” 誌にお書きになったものをお送りいただきました。(編集部)